『黒暗森林』の下巻の帯には、「本書は中国でシリーズ中もっとも評価が高い」というコメントがついている。裏を返せば、『死神永生』が『黒暗森林』よりも評価が落ちるということになる。**それもそのはずで、『死神永生』は文字通り時空の果てまで描こうとしているため、どうしても大風呂敷を広げ過ぎたという謗りを免れることは難しい。特に小説の最後の十分の一は偶然に次ぐ偶然が起こり、設定集を読んでいるかの如く物語性が薄く、小説としての完成度が高いとは決して言えない。「中途半端なまま終わってしまった」という印象を読者が受けるのも無理からぬことである。**

しかし三部作の中で私が一番好きなのは『死神永生』である。スケールの壮大さ、そして時空の果てまで描き切ろうという著者の野心を買ったためである。本書では壮麗な、宇宙の究極の真相が提示されている。その真相は恐ろしく、それと比べれば三体人の地球侵略なんて可愛いものである。更には「**ゼロ光速」「死線」「宇宙回帰運動」「帰零者」「時間の真空」「黒域」「光の墓」「低光速ブラックホール」「ビッグ・クランチ」「ビッグ・リップ」など、コアな SF 設定がつるべ打ちになっている。これらの設定の提示が唐突過ぎて物語として消化され切れていないのは残念だ**が、それでも非常に想像力を掻き立てられた。暗黒物質など現代宇宙論においてまだ正体が明らかになっていない存在について独自の解釈を提示しているところも面白い。

三体人が小説内で正式に登場することはない。なので結局三体人がどんな形をした異星人なのか、小説の読者はついに知らないし（映像化すればあるいは明らかになるかもしれないが）、第一部『三体』を読んだ読者が想像するであろう地球人と三体人との熾烈な宇宙戦争も、そもそも起こらない。これらの事実からも分かるように、『三体』シリーズは宇宙論や異星文明に深く踏み込んでいるが、本質的には徹頭徹尾、地球人の人間ドラマである。

地球人類が三体星人、または他の高度な技術を持つ異星文明のように冷徹で合理的な判断ができず、何度も慌てふためき、右往左往し、滑稽な様相を呈するのは、地球人類には様々な感情と道徳観があるからである。憎悪、嫉妬、私欲、喜び、怒り、悲しみ、驕り、そんな感情の数々が人間の目を眩ませ、「人を殺してはいけない」「生き物はみな平等である」「平和は尊ばれるものである」といった道徳観が人の足をすくう。あまりにも果てしなく、あまりにも暗くて冷たく、あまりにも無情で恐ろしい宇宙の真相と対峙した時でも、人間は感情と道徳を捨てきれず、そのために文明の生存競争において幾度も判断を誤ってしまう。しかしそんな感情と道徳こそが、人間を人間たらしめる所以とも考えられる。とすると、『三体』シリーズは人間性に絶望した人間批判の小説ではなく、むしろ人間礼賛の側面を持っているといえよう。

とはいえ、シリーズを通読した後、違和感を覚えるところが全くないというわけでもない。**まず、小説内に出てくる国際機関（国連や惑星防衛理事会など）は妙に善人面過ぎて、もはやナイーブな域に達している。**一人でも人間に危害を及ぼすことなく三体人を撃退する方法が存在すると本気で信じているのか、面壁者が画策している計略が一部の人間の犠牲を前提にしていることを知ると、すぐに却下し、面壁者を断罪しようとする。現実世界の国際機関がそこまでナイーブなほど善良なのか、甚だ疑問である。後進国の人間を犠牲にしてでも先進国が生き残る手段を模索するのではないだろうか。**そもそも 400 年後の「三体危機」が判明した時点ですぐ民間の一般人にまで広く公表するかどうか、かなり怪しい。大恐慌を防ぐために情報を隠蔽してもおかしくないのではないか。コロナと違って、四百年後に襲来する宇宙人など一般人には知る手段がないのだから。**

民間人の方も、四百年後に地球が侵略されるという情報をそこまで我が事として捉え、様々な滑稽な行動に出るのが不思議である。滑稽な行動とは、自分の 400 年後の子孫が地球外へ逃げられるように大金をはたいて「逃亡ファンド」を買ったり、全てのリソースを武器の開発に費やして飢饉を招いたりといったことである。どうせ自分は無事この生を全うすることができるのだから、そこまで自分の血筋にこだわり、400 年後の子孫の心配までしてどうする？　**庶民にとって 400 年後の地球の危機より、目の前の生活の方が大事だと思うはずだ——そう考えるのは私だけだろうか。**

しかし**何よりも最大の弱点は、やはり女性描写である。『三体』シリーズでは葉文潔以外、大抵の女性登場人物は魅力に欠けている。**小説の中で女性は常に善良で、平和を望み、したがって優柔不断で、弱々しい人間として描かれる（『死神永生』の主人公・程心がその代表格である）。対して世界を救えるのは、人を平気で殺せる残忍さを持つ、決断力のある男性である。シリーズを通読すると、著者のそうした「男らしさ」と「女らしさ」の固定観念がかなり根強いのではないかと思えてならない。

総評　穴蔵の溝鼠が見た夢　「ポリフェルス狂恋夢」トマス・ハリス「ハンニバル」グレッグ・イーガン「万物理論」